

## 報告

## 育児における暴力・暴言の実態と背景要因の関係

高窪美智子 西村真実子 津田朗子\* 関秀俊\*

田屋明子 井上ひとみ 林千寿子\*\*

## 概要

虐待的状况に至る前段階から虐待に至るまでの育児状況を、暴力と暴言の頻度と程度により、①ノーマル、②ノーマルグレイ、③虐待的グレイ、④虐待イエローの4段階に分類することを試み、その実態を明らかにするとともに、各段階の状況にある母親の関連要因を比較し、どのような要素が虐待状況に繋がるのかを検討した。3ヶ月・1歳半・3歳児健診を受診した母親1486名に調査用紙を配布し、郵送またはその場で537名より回収した。その結果、思い切り叩いたり暴言を繰り返す言うことが『よく』または『時々』ある「虐待イエロー」状況の母親が、夜泣きや後追い、いたずらなどの育児困難場面を経験したことのある母親376名のうち156名(41.5%)で、このうち『よく』行う者が24名であった。上記①から④の状況に至るほど、実父母やわが子との相性が良くない、妊娠を望んでいなかった、育児に完璧さを求める、父親と気持ちが通じない母親が有意に多くなること、また虐待イエロー状況にある母親がその他の母親に比べ、実父との相性が良くない、妊娠を望んでいなかった、もともと子どもが嫌い、我が子が好きになれない母親が有意に多いことが分かった。これらのリスク要因が重なることが虐待的な親子関係への悪化に繋がるのではないかと思われた。

キーワード 乳幼児、母親、育児、暴力、暴言、育児困難、虐待

## 1. はじめに

重度の虐待は子どもの生命予後が悪いばかりでなく、成長の遅れや情緒障害などが認められるので、重度に至る前の段階で親子に気づき支援することが望まれる。しかし、虐待の事実の隠蔽傾向や、第三者が虐待と疑いを判別する困難性、および虐待に気付いたりその危険性を予測するような精度の高い方法が確立していないなどの理由により、関連職者は、虐待に至る前や虐待がエスカレートする前に親子に予防的に関わることが十分にできていない。予防的に関わるためには、まず虐待的状况に至る前段階から虐待に至るまでの連続的な育児の実態を明らかにする必要があるが、これまでの調査は、いわゆる虐待グレイゾーンを対象にしたものが近年みられるものの<sup>1)</sup>、多くは重度の虐待を対象としたものか、あるいは育児不安の調査である。

虐待とは、子どもの心身のすこやかな育ちをそこねる行為や態度が継続され、結果的に子どもを精神的に追い詰め、深く傷つける状況といえる。どんなに愛情があっても、またしつけのつもりであっても、親の言動が結果的に子どもを傷つけ、

すこやかな育ちに悪影響を与えているのならば虐待である<sup>2)</sup>。そして子どもの心身に悪影響が出た後に介入するのではなく、予防的に関わる重要性を考えるならば、子どものすこやかな育ちに悪影響を与える可能性のある状況が虐待といえる。本研究では、「虐待」を、一般的にイメージされているであろう、悲惨な暴力行為等のみをいうのではなく、心理的虐待をも含む、上記のような概念としてとらえた。そして、虐待的状况の前段階から虐待に至るまでの育児状況を、「暴力」と「暴言」の頻度(よく・時々・ない)と、程度(強度・軽度)により、①ノーマル、②ノーマルグレイ、③虐待的グレイ、④虐待イエローの4段階に分類することを試み、その実態を明らかにするとともに、各状況にある母親の関連要因を比較し、どのような要素が虐待的状况に繋がるのかを検討した。

「④虐待イエロー」とは、叩く、つねる等の暴力を思いっきり行ったり(重度の暴力)、「お前なんか産まなければよかった」「あんたなんか嫌いだから」等の子どもを傷つける暴言を繰り返す言う等の行為が頻度に関わらずみられる育児状況を示している。また、軽度の暴力(軽く叩く)や、暴言(一言二言暴言を言う)がよくみられる状況を「③虐待

\*金沢大学医学部保健学科 \*\*はやし助産院

的グレイ」,時々みられるのを「②ノーマルグレイ」とし, いずれの行為も見られない育児状況を「①

ノーマル」とした(図1).

程度 \ 頻度	よく	時々	しない
強度 (思い切り叩く 繰り返し暴言を言う)	④虐待イエロー		①ノーマル
軽度 (軽く叩く 一言二言暴言を言う)	③虐待的グレイ	②ノーマルグレイ	

図1 育児状況の4分類

本来, 極端な暴力やネグレクト, 性的虐待の場合以外は, 親の行為の内容, およびその程度や頻度だけで子どもが虐待的状況にいるかどうか, すなわち子どもが傷ついていないか, あるいは子どもがすこやかに育つ環境といえるかどうかを判断するのは非常に難しい. たとえ暴力・暴言があっても子どもは傷ついておらず, 愛情ある親子関係である場合もありうるからである. しかし, 調査結果から虐待的状況であるかどうかを判断するのが本研究の目的ではない. 一方, 虐待的状況であるといっても, いつも深刻な状況だとは限らず, 暴力, 暴言, 拒否的な態度などは断続的にみられるものの, 全くない時期もある. 親の育成歴が関連すると思われる根源的な不安や, 子どもを受け入れることの困難感・不快感, 苦悩が日々の出来事により増幅または軽減され, それが虐待行為の発生につながっている. このような状況が, 人格形成途上にある子どもに大きなダメージを与える. これが, 虐待問題の本質である. したがって, 本研究では, 周期的ともいえる虐待的状況の変化そのものを「虐待」ととらえ, その実態と悪化につながる要因を明らかにしたいと考えている.

## 2. 研究方法

### 2. 1 研究対象者

対象は, 市町村などにおける3か月児, 1歳半児, 3歳児の各健診を受診した母親1486名である.

### 2. 2 研究方法

無記名による質問紙調査を上記の施設に依頼し, 承諾を得た32施設において, 来場した対象者に研究目的や倫理的な配慮などを記載した調査依頼書にて説明をした上で, 了解が得られた者に調査用

紙を渡した. 回収は, 対象者の希望によりその場での回収と郵送による回収を行った.

### 2. 3 倫理的配慮

調査への協力は本人の自由意志によるものとし, 拒否もしくは中断してもなんら不利益を被ることはないこと, 調査内容は本研究にのみに使用され, 個人が特定されるものではないこと, プライバシーは厳守することなどを調査依頼書に記入するとともに, 口頭でも説明した.

### 2. 4 調査内容

調査内容は, 対象者の属性, 育児サポートや子どもが好きかどうかなどの育児を取り巻く状況, 子育てや虐待行為の実態である.

子育てや虐待の実態は, 3ヶ月, 1歳半, 3歳の発達過程において, 子どもの欲求への対応が難しいと思われる育児場面を記述し, その場面において母親の暴力, 暴言の程度・頻度等を調査した. 場面については, Careyの乳幼児行動様式質問紙(庄司訳, 1978)を参考とし, 3ヶ月児は「夜泣き」と「ミルクの飲みの悪いとき」の2場面, 1歳半児は「いたずら」と「後追い」の2場面, 3歳児は「お漏らし」, 「いたずら」, 「かんしゃく」の3場面を設定した.

### 2. 5 分析方法

子育ての状況により, 母親を①ノーマル, ②ノーマルグレイ, ③虐待的グレイ, ④虐待イエローの4群, または①②③の群と, ④虐待イエローの2群に分類し, 2または4群における母親の要因に差がないかを $\chi^2$ 検定またはFisherの直接確立法を用いて分析した.

### 3. 結 果

#### 3. 1 対象者の属性(表 1)

537 名の有効回答があり(有効回答率 36.1%), このうちいずれかの育児場面において困難を伴った母親は 376 名(70.0%)であり, これらの母親の回答を今回の分析対象とした.

376 名の母親の平均年齢は  $30.0 \pm 4.1$  歳, 就業

率 26.7%であった. 子どもは, 男児 198 名(53.4%)で, 3ヶ月児 60 名(30.4%), 1歳半児 69 名(34.8%), 3歳児 69 名(34.8%)であった. また出生順位は, 第1子が 130 名(34.9%), 第2子 172 名(46.2%), 第3子以降 70 名(18.6%)であった. 低出生体重児は 23 名(6.2%), 発達遅延児は 31 名(8.3%)であった. 核家族が 60.4%を占めていた.

表 1 対象の属性

調査項目	全体 (n=376)	3ヶ月 (n=105)	1歳半 (n=134)	3歳 (n=137)
母の年齢 (歳)	30.0 ± 4.1	28.8 ± 3.8	29.9 ± 4.0	31.6 ± 3.9
父の年齢 (歳)	32.7 ± 4.9	31.4 ± 4.8	32.5 ± 4.6	34.2 ± 4.7
子の出生時体重(g)	3112.9 ± 425.3	3127.5 ± 498.4	3077.9 ± 449.4	3136.9 ± 385.9
家族構成 核家族	227 (60.4)	58 (55.2)	81 (60.4)	88 (64.2)
母の就業率	100 (26.7)	21 (20.0)	34 (25.4)	45 (32.8)
子の性別 男	198 (53.4)	60 (57.7)	69 (52.7)	69 (50.7)
兄弟 あり	242 (65.1)	59 (58.7)	78 (59.5)	105 (76.6)
出生順位				
第一子	130 (34.9)	45 (43.3)	53 (40.5)	32 (23.4)
第二子	172 (46.2)	44 (42.3)	57 (43.5)	71 (51.8)
第三子以降	70 (18.6)	15 (14.3)	21 (15.7)	34 (24.8)
低出生体重児	23 (6.2)	6 (5.8)	13 (9.8)	4 (3.0)
先天性疾患あり	14 (3.7)	5 (4.7)	4 (3.0)	5 (3.6)
発達遅滞 あり	31 (8.3)	12 (11.4)	6 (4.5)	13 (9.5)

人(%)

#### 3. 2 育児を取り巻く母親の状況(図 2)

育児の相談相手がいない母親は 11.2%, 夫と気持ちに通じていないと感じる者は 21.7%であった. また, 育児の情報源は「育児雑誌・テレビ等」が 68.1%と最も多く, 次いで両親 62.9%, 近所の人 48.6%であった. 育児を物理的にサポートしてくれる者がいるのは 331 名(88.0%)であり, サポーターは「夫」を挙げる者が 294 名(88.8%), 「実父母, 義父母」が 167 名(50.5%)と多かった.

育児に完璧さを求める者が 8.2%, 妊娠を望んでいなかった者 13.6%, 妊娠中に育児への不安があった者 39.3%であった. また, 実母と相性が良くない者 55.1%, 実父と相性が良くない者 65.9%と大半を占めていた. わが子と相性がよくない者, 子どもを好きになれない者がそれぞれ 16.6%であった.

#### 3. 3 育児場面における暴力・暴言の実態

いずれかの育児場面で虐待イエロー状況にある母親は育児困難場面を経験した母親 376 名のうち 156 名(41.5%)で, 年齢別では 3ヶ月児 105 名のうち 9 名(8.6%), 1歳半児 134 名のうち 59 名

(44.0%), 3歳児 137 名のうち 88 名(64.2%)と年齢が上がるにつれて多くなっていた(図 3). このうちよく暴力・暴言を行う母親が, 3 か月児で 2 名(夜泣き場面 1 名, 飲みの悪い場面 1 名), 1歳半児で 3 名(いたずら場面で 1 名, 後追い場面 2 名), 3歳児で 19 名(おもらしの場面で 3 名, いたずら場面 8 名, かんしゃく場面で 8 名)いた.

いずれかの育児困難場面で虐待的グレイの状況にある母親は, 育児困難を経験した 376 名の母親のうち 84 名(22.3%)で, 年齢別では 3ヶ月児 105 名のうち 11 名(10.4%), 1歳半児では 134 名中 30 名(22.3%), 3歳児では 137 名中 43 名(31.4%)で, 虐待イエローの状況と同様に年齢とともに増えていた(図 3).

さらにいずれかの育児場面でノーマルグレイの状況の母親は, 育児困難を経験した 376 名の母親のうち 68 名(18.1%)で, 年齢別では 3 か月児 105 名中 27 名(39.7%), 1歳半児 134 名中 38 名(55.9%), 3歳児 137 名中 3 名(4.4%)で, 1歳半児に多かった(図 3).

どの育児場面においても暴力や暴言がまったくみられなかった母親は, 育児困難場面を経験した

376名の母親のうち68名(18.1%)で、年齢別では3か月児で105名中58名(85.3%)、1歳半児134名中7名(10.3%)、3歳児137名中3名(4.4%)で、3か月児に多かった(図3)。

育児の場面別に暴力・暴言の実態をみると、3ヶ月児では、飲みの悪い場面で暴言がわずかにあるが、暴力はないのに対して、夜泣き場面では暴力が4名(3.8%)、暴言が5名(4.8%)にあった。1歳半児では、後追い場面よりもいたずら場面で暴力・暴言が多く、暴力39名(29.1%)、暴言18名(13.1%)であった。3歳になると、いずれの年齢よりも暴力・暴言が多かった。特に、お漏らし場面で多く、暴力38名(28.4%)、暴言30名(22.1%)であった(図3)。

暴言や暴力をしそうになった母親は、3か月児

では39.0%で、1歳半児では73.1%、3歳では72.3%で、1歳半児、3歳児が多かった。

### 3. 4 暴力・暴言の理由

3か月児への暴力・暴言の理由は、母親自身の精神的疲労34.8%、身体的疲労32.4%、努力しても報われなかった19.3%の順に多く、1歳半児では、子どもの強い欲求61.2%、精神的疲労37.3%、努力しても子どもに伝わらない25.3%、‘そうすると子どもは分かるから’等のしつけについての考え20.9%の順に多かった。3歳児では、子どもの発達についての知識不足70.1%、精神的疲労61.3%、努力しても子どもに伝わらない55.3%、子どもの強い欲求54.7%、しつけについての考え43.1%、身体的疲労41.6%の順に多かった。

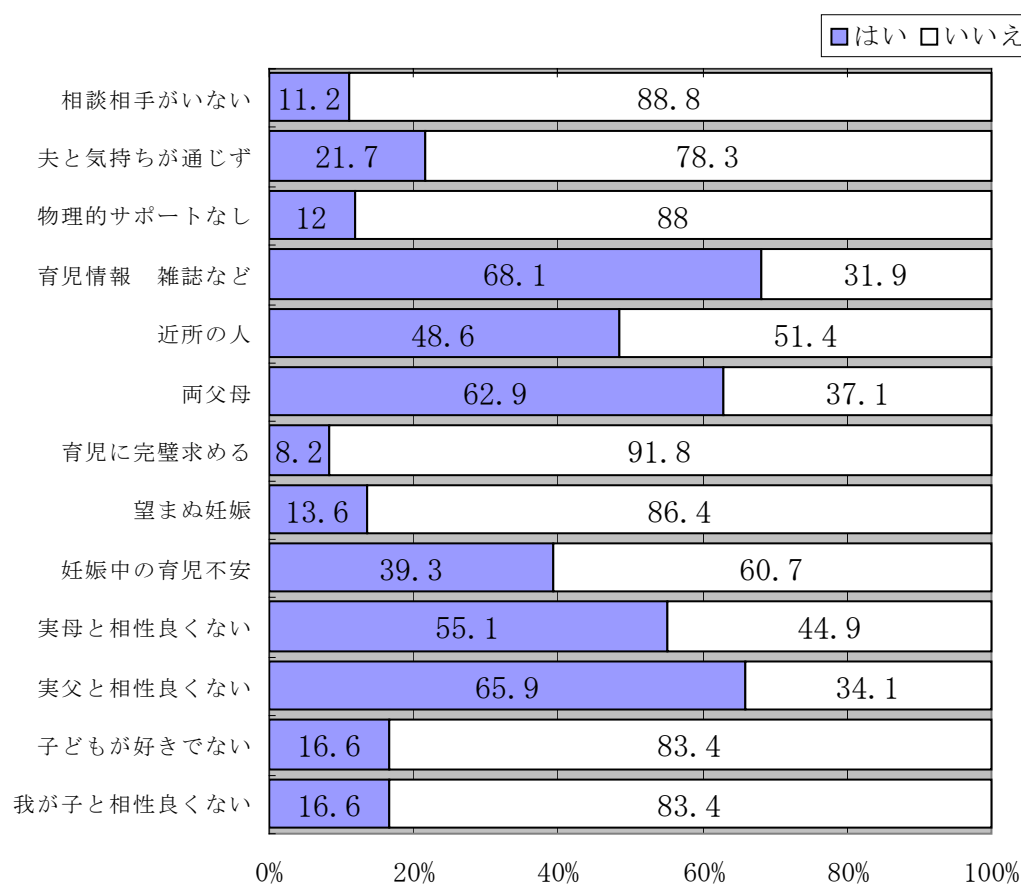


図2 育児を取り巻く母親の状況

n=376

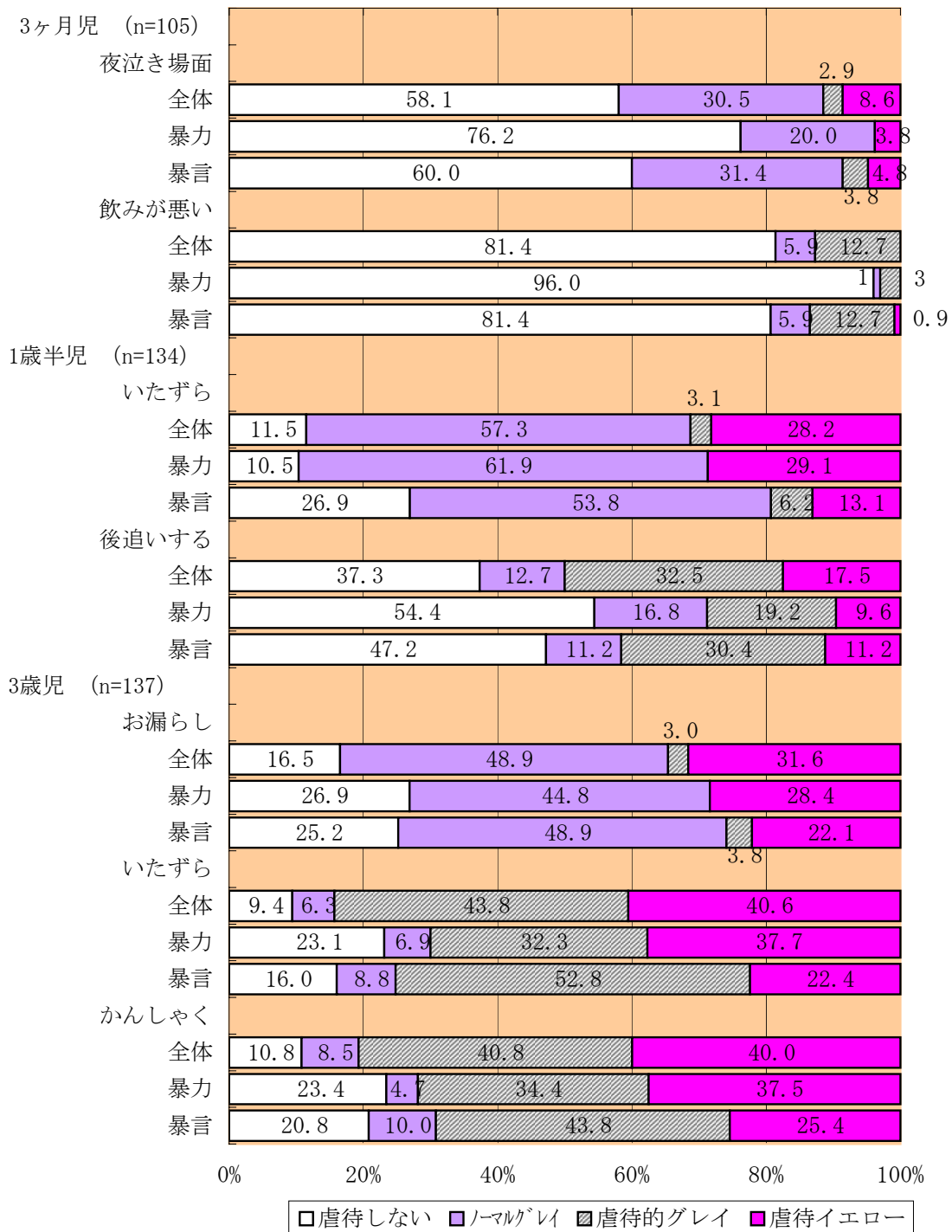


図3 育児場面における母親の対応

### 3. 5 暴力・暴言に対する母親の悩み(図4)

暴力や暴言に対して悩んだか、あるいは悩んでいるかを、②ノーマルグレイ、③虐待的グレイ、④虐待イエローの3群別にみると、②③④と虐待状況に至るほど悩んでいる母親が多かった。また、虐待イエロー状況にあっても悩まない母親が 35

名(22.4%)いた。

一方、3 か月児の母親では虐待的グレイ状況にある母親に悩む割合が高く、1 歳半児ではノーマルグレイ状況の母親が、さらに3 歳児では虐待イエロー状況の母親で悩む割合が高かった。

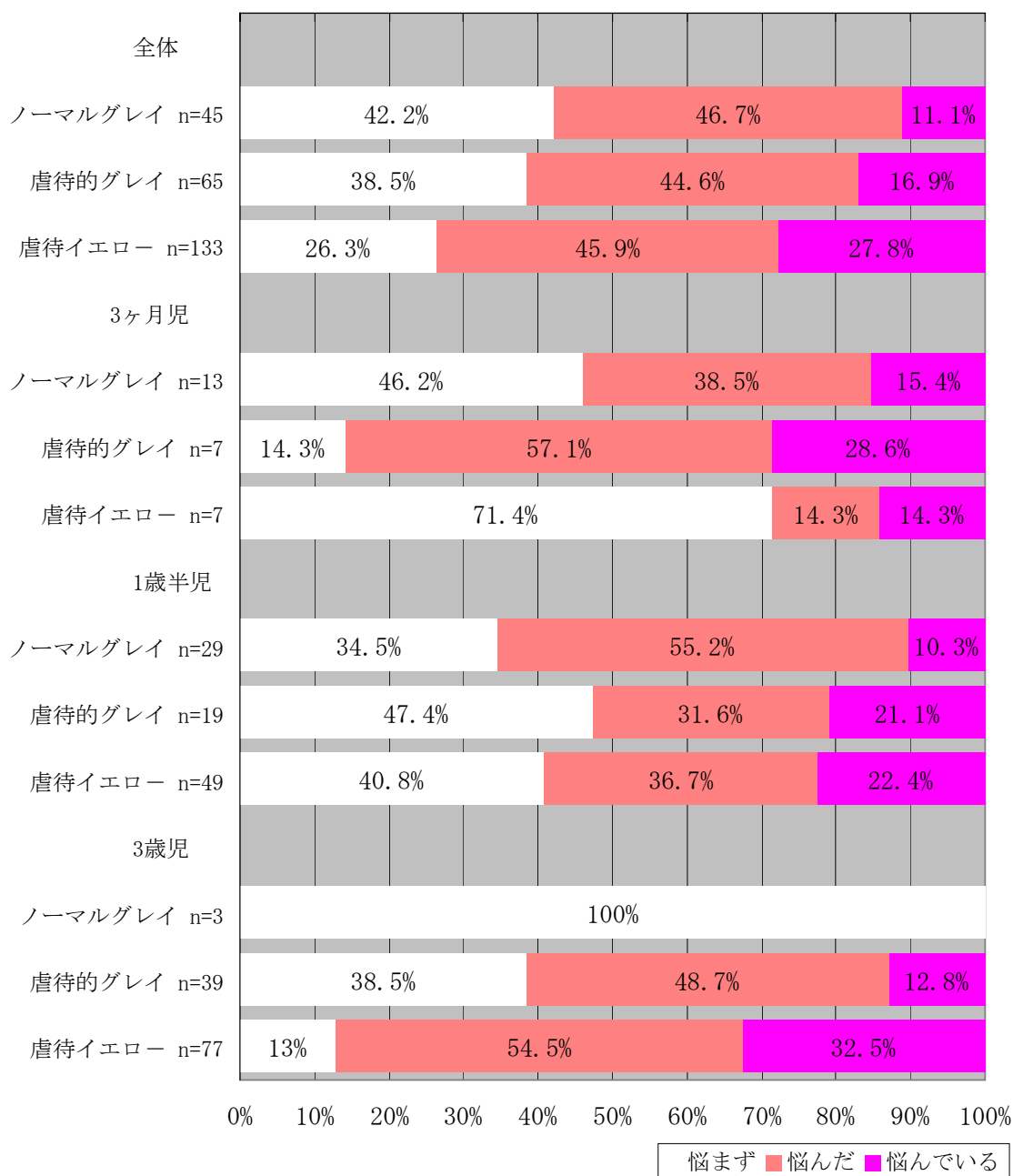


図4 暴力・暴言に対する母親の悩み

### 3. 6 子どもへの対応と母親の要因の関係

(1) 育児(虐待)状況の4群別にみた母親の要因  
ノーマルから虐待イエローに至るまでの4群間で母親の要因を比較し、有意な関係がみられたものを表2に示した。

育児に完璧を求める母親は全体で31名(8.2%)であったが、ノーマル群の中では2.9%、ノーマルグレイ群の中では4.4%、虐待的グレイ群の中では7.1%、虐待イエロー群の中では12.8%で、

ノーマル群から虐待イエロー群に至るにつれてその割合が有意に多かった。同様に、妊娠を望んでいなかった者、我が子と相性が良くないと感じている者、夫と気持ちが通じないと感じている者、実母と相性が良くないと感じている者、実父と相性が良くないと感じている者、兄弟がいる者(子どもが2人以上)、暴力・暴言に悩んでいる者が、ノーマル群から虐待イエロー群に至るにつれて有意に多かった。

表2 暴言・暴力行為と母親の背景要因の関係

(N=376)

背景要因	全体	ノーマル	ノーマルグレイ	虐待的グレイ	虐待イエロー	P
育児に完璧を求める	31/376 (8.2)	2/66 (2.9)	3/68 (4.4)	6/84 (7.1)	20/156(12.8)	0.04 *
妊娠を望んでなかった	51/376 (13.6)	5/68 (7.4)	8/68 (11.8)	7/84 (8.3)	31/155(20.0)	0.02 *
我が子と相性良くない	62/376 (16.4)	7/68(10.3)	8/68 (11.8)	16/83 (19.3)	31/155(20.0)	0.03 *
夫と気持ちが通じない	81/376 (21.5)	8/68(11.8)	18/67 (26.9)	14/84 (16.7)	41/153(26.8)	0.03 *
実母との相性良くない	204/376(54.2)	27/67(40.3)	37/67 (55.2)	48/83 (57.8)	92/153(60.1)	0.05 *
実父との相性良くない	245/376(65.2)	36/67(53.7)	41/67 (61.2)	53/82 (64.6)	115/156(73.7)	0.02 *
子どもが2人以上	264/376(70.2)	37/68(54.4)	34/66 (51.3)	61/83 (73.5)	132/217(60.8)	0.003 **
虐待行為に悩んでいる	179/376(47.6)	15/26(57.7)	26/45 (57.8)	40/65 (61.5)	98/133(73.7)	0.04 *

\* P&lt;0.05 , \*\* P&lt;0.01 人(%)

さらに、これらの要因間には有意な関係を示すものが多く(表3),例えば、妊娠を望んでいなかった者に、実父母と相性が良くない、もともと子どもが嫌い、我が子が好きになれない、夫と気持ちが通じない、妊娠中に育児への不安があったと答える者や、暴力・暴言の理由に「育児の限界」や「身体疲労」を挙げる者が有意に多かった。

(2) 虐待イエロー群と「ノーマル・ノーマルグレイ・虐待的グレイ群」の2群別にみた母親の要因(表4)

①ノーマル、②ノーマルグレイ、③虐待的グレイを1つにまとめ(以下、非虐待群と略す)、これと④虐待イエローの2群間で、同様に母親の要因を比較し、有意差がみられたものを表4に示した。

妊娠を望んでいなかった者は全体で 51 名(13.6%)であったが、虐待イエロー群の中では 20.0%, 非虐待群の中では 9.1%で、虐待イエロー

群の方に有意に多かった。また同様に、もともと子どもが嫌いな者、わが子が好きになれない者、実父との相性が良くない者、暴力・暴言に悩んでいる者、子どもが2人以上の者が、虐待イエロー群の方に有意に多かった。

子どもの年齢別集団で同様に分析したところ、全体の結果とほぼ同じ要因が虐待イエロー群の方に有意に多かった。すなわち、3 か月児の母親では、育児に完璧を求める、夫と気持ちが通じない、わが子と相性が良くない者等が、1 歳半児の母親では、妊娠を望んでいなかった、育児に完璧を求める者等が、3 歳児の母親では、妊娠を望んでいなかった、夫と気持ちが通じない、実父母と相性が良くない、暴力・暴言に悩んでいる者等が、非虐待群に比べ虐待イエロー群の方に有意に多かった。

表3 母親の背景要因間の関係

母の背景要因 (N=376)	育児行為に悩む	もともと子どもが嫌い	実父と相性良くない	実母と相性良くない	妊娠中の育児不安	夫と気持ちが通じず	我が子好きになれない	我が子相性良くない	母の年齢	子の年齢	低体重児	虐待理由				
												育児限界	身体疲労	精神疲労	サポート力	忙しい
妊娠を望んでいなかった		*	*	*	**	**	*					*	**			
育児行為に悩む			*			*				*	*	**	**		**	**
もともと子どもが嫌い							*	**	*							
実父との相性良くない	*											*				
育児に完璧を求める								*					*			
子どもが2人以上いる		*					*				*					

\* P&lt;0.05 , \*\* P&lt;0.01

表4 虐待イエロー群と非虐待群(ノーマル・ノーマルグレイ・虐待的グレイ)別にみた母親の背景要因

対象年齢	背景要因	ノーマル～虐待的グレイ	虐待イエロー	P
3ヶ月 (n=105)	育児に完璧を求める	3/95(3.2)	3/9(33.3)	0.008 **
	夫と気持ちが通じ合わない	15/96(15.6)	4/9(44.4)	0.01 **
	我が子との相性が良くない	13/96(13.5)	4/9(44.4)	0.03 *
	(虐待理由)発達に対する知識不足	2/96(2.1)	3/9(33.3)	0.004 **
	身体的疲労	3/95(3.2)	6/9(55.6)	0.03 *
1歳半 (n=134)	妊娠を望んでいなかった	6/75(8.0)	11/58(18.9)	0.05 *
	育児に完璧を求める	8/74(7.8)	11/58(18.9)	0.03 *
	父の年齢 (27歳以上)	15/75(20.0)	22/59(37.2)	0.02 *
	子どもが虚弱	5/75(6.6)	4/58(6.8)	0.03 *
	(虐待理由) 干渉される	7/75(9.3)	6/59(10.1)	0.03 *
3歳 (n=137)	子の強い欲求	40/75(53.3)	42/59(71.2)	0.02 *
	妊娠を望んでいなかった	3/49(6.1)	18/88(20.5)	0.02 *
	夫と気持ちが通じ合わない	6/48(12.5)	24/86(27.9)	0.04 *
	実母との相性が良くなかった	22/48(45.8)	52/86(60.4)	0.03 *
	実父との相性が良くなかった	25/47(53.2)	67/88(76.1)	0.02 *
	虐待行為に悩んでいる	25/43(58.1)	57/77(87.0)	0.001 **
	(虐待理由) 経験学習	9/49(18.4)	30/88(34.1)	0.03 *
全体 (n=376)	精神的疲労	23/49(46.9)	61/88(69.3)	0.008 **
	妊娠を望んでいなかった	20/220(9.1)	31/155(20.0)	0.002 **
	もともと子どもが嫌いだった	83/219(37.9)	74/155(47.7)	0.04 *
	我が子が好きになれない	3/220(1.4)	10/154(6.5)	0.009 **
	実父との相性が良くなかった	130/216(60.2)	115/156(73.7)	0.007 **
	虐待行為に悩んでいる	81/136(59.6)	93/133(70.0)	0.04 *
	子どもが2人以上	132/217(60.8)	110/155(70.9)	0.02 *
	(虐待理由) 身体的疲労	32/220(28.6)	37/156(39.7)	0.02 *
	忙しい	32/220(14.5)	37/156(23.7)	0.02 *

\* P&lt;0.05, \*\* P&lt;0.01 人(%)

#### 4. 考 察

虐待的状況に至る前段階から虐待に至るまでの育児状況を、暴力と暴言の頻度と程度により4段階に分類し、その実態明らかにするとともに、4段階の状況にある母親の関連要因を比較した。

本調査では、思い切りの暴力や繰り返しの暴言を「よく」または「時々」するという『虐待イエロー』の状況にある母親が4割と多く、特に「よく」する者が24名いた。育児に関するこれまでの多くの調査では、かっとなり我が子を叩く母親は約1割弱である<sup>3)</sup>。今回の結果が4割と多かったのは、実父または実母との相性が良くない者、すなわち虐待の世代間伝達を推測させる者が本調査の対象者の過半数を占めていたせいではないかと思われるが、一方では、夜泣き等の育児の具体的な困難場面を想定して設問したので、子どもへの暴力行為等についても答え易く、実態をより正確に把握できたとも考えられる。

さらに、虐待イエロー群がその他の群に比べ、またノーマル群から虐待イエロー群へと暴力・暴

言の状況がひどくなるにつれ、実父または実母との相性が悪い者が多くいた。これは、自分の親との関係に問題があると思っている者が暴力・暴言の状況に至りやすいこと、およびその状況がエスカレートしていく可能性があることを示している。

また同様に、妊娠を望んでいなかった者や我が子が好きになれない者、夫と気持ちが通じない者、育児に完璧を求める者等も、ノーマル群から虐待イエロー群へと暴力・暴言の状況がひどくなるにつれ、その割合は多くなっていた。さらに、妊娠を望まなかった者には、実父母との相性が悪い者や我が子が好きになれない者が多かった。被虐待歴をもつ者に我が子が好きになれないと訴える者が多いことや、妊娠を望んでいない者にネガティブな対児感情をもつ者が多いことから<sup>4)</sup>、「妊娠を望まない」、「我が子が好きになれない」という事態は、虐待的親子関係が生じる可能性を示すリスク要因といえよう。渡辺<sup>5)</sup>によると、妊娠中に、かつて乳幼児だった自分、意識にもものぼらぬ遠い昔の世界の記憶を想起したり、あるいは理由なき不



安に襲われ、また、否定的な脈絡の状況では、妊娠や胎児を否定的にとらえる場合もあるという。このような臨床的指摘からも、「妊娠を望まない」という心理と、子育てや虐待の世代間連鎖の関係がうかがえる。

虐待イエロー状況の母親は、3か月、1歳半、3歳と子どもの年齢が増すにつれてその割合が多くなっていたが、いずれかの年齢の育児状況において暴力・暴言が有意に多いということとはなかった。このことは、自我の出現や、言葉で巧みに反抗する等の、2～3歳児の発達的特徴に関わる対応の難しさが暴力・暴言の誘因になっている可能性はあっても、そうでない場合も多くあることを示している。虐待は、親自身の要因や育児環境の要因等、よくない状況が重なったときに発生する。上述したように、また先行研究の結果<sup>6)</sup>からも、虐待の発生に、実親との間における葛藤の強さや被虐待歴が関与していることは明らかであるので、核になる要因が「被虐待歴」であり、付帯条件の一つとして子どもの年齢的特徴等が関わる「対応の難しさ」が挙げられると思われる。

一方、虐待イエロー状況にあっても3割弱の母親がその行為を悩んでいなかった。被虐待歴をもつ親が自分のされてきたように我が子に当たり、自分の虐待行為に罪意識を感じていない場合があるとの報告が散見されるが<sup>7)</sup>、3割弱の中にはそのような母親が存在したかもしれない。しかし一方では、虐待的な親子関係を暴力・暴言の程度と頻度で評価した本研究の方法論が、虐待イエロー状況にあったとしても、暴力や暴言が『時々』の場合においては、アタッチメントが良好であれば親子関係に問題なく、そのような場合は特に自分の行為に悩んだりしないのかもしれない。したがって、虐待状況にありながらも悩まない母親は3割より少数であると推察される。

## 5. 結 論

子どもを思い切り叩いたり、暴言を繰り返し言

うことが『よく』または『時々』ある「虐待イエロー」状況の母親が、育児困難場面を経験した母親376名のうち156名(41.5%)であり、このうち『よく』行う者が24名であった。暴力や暴言の程度・頻度が悪い状況にあるほど、実父母やわが子との相性が良くない、妊娠を望んでいなかった、育児に完璧を求める、父親と気持ちが通じない母親が有意に多くなること、また虐待イエロー状況にある母親がその他の母親に比べ、実父との相性が良くない、妊娠を望んでいなかった、もともと子どもが嫌い、我が子が好きになれない母親が有意に多いことより、これらのリスク要因が重なることが虐待的な親子関係への悪化に繋がるのではないかと思われた。

## 謝辞

本研究の調査に協力いただきました関係者の皆様に深く感謝いたします。

## 文献

- 1) 串崎真志, 白山真知子. 田中優子他: グレーゾーンケースの研究(3)―支援者側疲労感に注目して―. 日本子どもの虐待防止研究会第9回学術集会集, 81, 2003.
- 2) 才村純: ぼくをたすけて, 中央法規, 12-13, 2004
- 3) 前掲書: 29-31
- 4) 花沢成一: 妊娠・産褥期における不安の変動, 現代のエスプリ, 至文堂, 342, 87-97, 1996
- 5) 渡辺久子: 乳幼児精神医学から乳幼児精神保健へ, 7-11, 財団法人安田生命社会事業団, 1997
- 6) Kaufman J., Ziegler E.: Do abused children become abusive children?, Am. J. Orthopsychiatry, 57, 687-696, 1987
- 7) 社会福祉法人子どもの虐待防止センター編: 被虐待児と虐待する親の援助と治療, 30-31, 子どもの虐待防止センター, 1999

(受付: 2005年3月31日, 受理: 2005年6月10日)

## **Abuse or Abusive Language in Child Rearing: The Relationship between Reality and Background Factors**

Michiko TAKAKUBO, Mamiko NISHIMURA, Hitomi INOUE, Akiko TAYA,  
Hidetoshi SEKI, Akiko TSUDA, Chizuko HAYASHI

### **Abstract**

Child abuse or the use of abusive language that occurs during child rearing (from the evolving stage to the actual occurrence) was classified into four levels, depending on severity and frequency: 1) normal 2) normal in the gray zone, 3) cruelty in the gray zone, and 4) cruelty in the yellow zone. The related factors for the mothers at each level were compared with the others to determine the constituent elements that may lead to child abuse.

Method: questionnaires were distributed to 1,486 mothers who consulted a physician for their routine 3-month, 18-month, and 3-year pediatric examinations. Subsequently, 537 replies were collected by mail or on site.

Results: A total of 156 mothers (41.6%) were found to be in the cruelty yellow stage – i.e., resorting to violence without giving much thought to it and repeated use of abusive language ‘often’ or ‘sometimes.’ Of these, 24 replied that the incidents were frequent.

Progression of the abuse level from 1 to 4 was significantly related to the following factors confided by the mothers: discord with their own parents and children, children being the products of an unwanted pregnancy, mothers’ desire for perfection in their childrearing, and a lack of communication with the children’s fathers. Also, when mothers in the cruelty yellow stage were compared with other mothers, there was a significant increase in those who did not get on well with their own fathers, had not desired to become pregnant, had never liked children, or were unable to feel affection for their own children.

Conclusions: It seems that these concomitant risk factors lead to a deteriorating abusive parent/child relationship.

**Keywords** child, mother, child-rearing, cruelty gray zone, cruelty yellow zone